

~~~~~  
研究ノート  
~~~~~

両雄並び立った『オセロー』

狩 野 良 規*

ナショナル・シアター・ライブ (NT Live) から 1 本取り上げてみたい。イギリスでは 2009 年 6 月にスタートし、日本にも 2014 年 2 月に上陸した“映画館で見る演劇”たる NT ライブ。ライブと謳っているが何カ月か遅れての上映、でもその代わりに日本語の字幕がつく。飛行機の長旅をしなくても、イギリスで評判の芝居を日本の映画館で見られる。ほぼ隔月の上映、僕の最近の大きな楽しみのひとつである¹⁾。

その NT ライブを企画したナショナル・シアターの前芸術監督ニコラス・ハイトナーが演出した現代服の『オセロー』(2013 年, NT オリヴィエ劇場)は、オセローにエイドリアン・レスター、イアーゴにロリー・キニアを配した、僕のお気に入りの公演である。僕にしては珍しく、2 度も劇場へ見に行った。

開幕は、ヴェネチアならぬロンドンのパブの気分。けたたましく今日日^{きょうび}のポップ・ミュージックが流れて、舞台がスタートする。パブも客層によって店の雰囲気異なる。ここはさしずめ労働者階級が多く出入りしそうな酒場だろうか。

そのうるさいパブの前で、イアーゴがビールを片手に、タバコを吸いながら愚痴っている。オセローは俺を差し置いて、ほとんど実戦経験のないキャシオーを副官に任命しやがった、と。英語はコクニーなまりで、いかにも品のないしゃべり方。しかもこのロリー・キニア、シェイクスピアの詩行を変なところで切る、かなり癖のあるセリフまわし。それに、まだ 30 代なのに髪の毛薄

* 青山学院大学国際政治経済学部教授

1) 拙漫談「スクリーンでロンドンの演劇を」(『ARTLET』No.44, 慶應義塾大学アート・センター, 2015 年 9 月 所収)をご一読されたし。

く、丸顔で威厳なく、およそ“スター”とは縁遠い風貌である。だが、NT Liveでは『ハムレット』（2013年、NTオリヴィエ劇場）でも堂々の主役を張っている。実にユニークな、もっと言えば不思議な役者だが、このイアーゴー役でイギリス演劇界の最高賞たるローレンス・オリヴィエ賞、その最優秀主演男優賞を獲得した。と、そう、人気と実力を兼ねそなえた、今、売り出し中の俳優である。

イアーゴーが労働者階級出身の叩き上げの軍人なのに対して、オセローは悠々たる英雄將軍の風情。1幕3場は国家安全保障會議の乗りである。トルコ軍がキプロス島へ向かっているとの報が続々と入ってくる。そこへバラク・オバマよろしくエイドリアン・エスターがやって来て、白人の公爵や元老院議員たちを前に物怖じしない。

僕はこのジャマイカ系の黒人俳優、旅劇団チーク・バイ・ジャウルの『お気に召すまま』（1991年）で楚々としたロザリンドを演じているのを見て以来のファンである。同じくその舞台を見て彼を気に入ったピーター・ブルックは、後に『ハムレットの悲劇』（2000年、ブッフ・デュ・ノール劇場）でレスターをデンマーク王子役に据えた。また、ニコラス・ハイトナーがナショナル・シアターの芸術監督に就任して最初に演出した『ヘンリー五世』（2003年、NTオリヴィエ劇場）でも、レスターはタイトル・ロールを演じている。黒人が白人のお嬢様や王子、英雄国王に扮して違和感のない、なかなかの演技力の持ち主である。

ハイトナーはイラク戦争²⁾が開始された直後、自国の国王が敵地に乗り込む

2) イラク戦争にも注をつけておくべきか。2001年9月11日のニューヨーク同時多発テロ後、アメリカ（を主力とする）軍はビンラディンの首をとるべくアフガニスタンに侵攻（同年10月）、さらにイラクが大量破壊兵器を保有する（後に存在しないことが判明）との理由で、サダム・フセインを倒すべく2003年3月、同国になだれ込んだ。NTの『ヘンリー五世』は同年5月初演。なお、イギリスでは一連の軍事行動で米ブッシュ大統領と共闘したトニー・ブレア首相に批判が殺到、日本なら“犬”と呼ぶところだが、かの国では「アメリカのスビッツ」、「ブッシュのブードル」と罵声を浴びた。アメリカに同調したのが保守党ならまだしも、労働党政権だったことが、今日に至るまで英国のリベラル勢力の深いトラウマになっているとか。

愛国劇『ヘンリー五世』を、現代服で、中東とおぼしき設定で、むろん皮肉を込めて舞台に乘せ、話題を呼んだ。また、思い起こせば彼の出世作のひとつ、『ジョージ三世の狂気』（1991年、アラン・ベネット作）は、精神的に病んでいたといわれるジョージ三世（在 1760-1820 年）に首相ピットをはじめとする政治家たちが振り回される物語だが、ピットはマーガレット・サッチャーの姿とオーバーラップするのだそうで、NTリトルトン劇場の観客に大受けしていた³⁾。おまけの話だが、ウィキペディアによれば、ハイトナーはミュージカル『ミス・サイゴン』（1989年）を演出して大金を手にし、「これで、自分のやりたいことだけをできるようになった」と語ったとか。いいねえ。さらに儲けようというのではない、これからは自分の作りたい芝居だけを作れる。芸術家たる者、かくあるべし。

で、ハイトナーのNT芸術監督としての演出活動は『ヘンリー五世』に始まり、芸術監督最後の沙翁劇に、ふたたびエイドリアン・レスターと組んで『オセロー』を選んだ。どちらも今日の軍隊内部の状況を共鳴させて、古典劇に内在するアクチュアリティを引き出した。

2幕に入ると、場面はキプロス島に移る。そこは昔も今も近東地域ににらみを利かせる東地中海の軍事拠点である。シェイクスピアの時代はヴェネチア共和国とオスマン・トルコが奪い合い、大英帝国の時代のイギリスはエジプト、そしてスエズ運河の株を買収した後は植民地帝国の生命線たるインドへの海路を確保すべく、同島をトルコから奪取した。第二次大戦後は1960年にイギリスから独立したが、その後ギリシャ系住民とトルコ系住民の間で軋轢^{あつれき}が絶えない島である。

そんな係争地に迷彩服を着た英国軍が緊急出動してくる風。緊迫した雰囲気。けれども、トルコ軍は嵐により全滅した、と。あゝ、肩すかし。派遣された兵士たちはやることがない。ただ待つだけの退屈な日々。そうした折、イアーゴー

3) 舞台と同じナイジェル・ホーソン主演で映画化もされた。邦題『英国万歳!』（1994年、イギリス映画）。ただし、ハイトナー初監督の映画は、舞台ほど面白くない。

がキャシオーに飲めぬ酒を一気飲みさせ、失態を演じさせる（2幕3場）。

現代の観客にも400年以上前の芝居がスッと実感できる演出である。劇評には「超のつく明解さ（hyper-clarity）で各行、各プロットをX線透視している⁴⁾」と。しかり。ハイトナーは陸軍の退役将校にアドバイスを仰いでいる。彼は、ベレー帽のかぶり方など、細かいところまで俳優たちに教えたが、ロリー・キニアだけは従わなかったという⁵⁾。なるほど、キニアはセリフだけでなく、衣裳の着方などでも、イアーゴの粗雑さ、ぞんざいさを表現していた。

NTオリヴィエ劇場は、古代ギリシャの円形劇場を模した造りで、大きなラスト・ステージ（張り出し舞台）を客席が取り囲む。1,000人以上入る大劇場なのに舞台と客席との心理的な距離が近い、とても魅力的な演劇空間である。むろんスペクタクル劇もできる。だが、売れっ子の舞台装置家ヴィッキー・モーターは、キプロスの場面、可動式の仮設兵舎を登場させ、その閉鎖的とも思える狭いスペースで、イアーゴがオセローに毒を吹き込む名場面を演じさせた。

そう、開放的な空間は映画にこそふさわしい。演劇——とくにシェイクスピアのことば、ことば、ことばの劇——は、役者と観客が外部から閉ざされた場所、いわば秘めごとを語り、聞くがごとき親密性を共有できるのが持ち味である。だからロンドンでは、大きな芝居小屋で見ると観客の目を楽しませる仕掛けをいろいろとほどこしても、沙翁劇の究極の魅力は俳優の語るセリフ、そしてことばを介した人と人との緊張関係、彼らの内心の葛藤にあるという大原則はしっかりと守られる。つまりは、スペクタクルが俳優のセリフを邪魔しない。

『オセロー』の面白さはやっぱり、悪辣なるイアーゴが舌先三寸で火のないところにバタバタと煙をたて、余裕しゃくしゃくだった英雄將軍の嫉妬心をかき立てて、彼に愛する新妻の不貞を信じさせるやりとりにある。悪意に満ちた部下のねちっこくもいやらしいことばの魔術と、その毒に侵されていくオセローの猜疑心と嘆き、彼の奈落への落ちっぷりが見どころの芝居である。

4) Susannah Clapp, “Othello—review” *The Guardian*, 28 April, 2013.

5) NT Live の幕間の解説から。軍関係アドバイザーのジョナサン・ショーの言。

両雄並び立った『オセロー』

オセローは怒り心頭、安普請の兵舎の壁を拳^{こぶし}でぶち抜き、また仮設トイレの便器で吐く。イアーゴーは急いでコップに水道の水を汲むが、オセローが卒倒したのを見て、自分で飲んでしまう。クールで小さなアクションが笑いを誘う。

映画館の大画面の映像は、二人のいびり、いびられる表情をアップで捉える⁶⁾。僕のように演劇を、役者が豆粒のようにしか見えない天井桟敷でばかり見ている貧乏性の人間には、芝居小屋とは異なる魅力が味わえる。さらに NT ライブは舞台を全篇カットせずに中継するわけだから、約 3 時間の長丁場。一般に映画は 2 時間を越えると長く感じられる時代である。だが、演劇は生身の人間が目の前で演じているから、途中で休憩をはさんで 3 時間、見る者の集中力が保てる。そして NT ライブもまた、映画よりはるかにセリフの多い作品を、デジタルの高画質の映像によって、生の舞台に近い感覚で、長時間集中力を途切らせることなく鑑賞できる。

大きなスクリーンに映し出される役者たちのやりとりを見ていると、やはりシェイクスピア劇は、俳優のセリフ術と演技力が勝負なのを痛感させられる。ロリー・キニアのちょっとした言いまわしと仕草の妙。冒頭のバブの前での不満でも、3 幕と 4 幕のオセローを追いつめる嘘八百でも、青二才のキャシオー^{うかが}に昇進を阻まれた男の嫉妬心と復讐心が実によく窺える。

イアーゴーに関してはロマン派の大御所コールリッジの「動機なき悪意」なる一句が独り歩きして、謎多き大悪党というイメージが流布している。だが、キニアのイアーゴーはごくふつうの男。不服な人事に腹をたて、上官を陥れようとする奴なんて、そこいらへんにいくらでもいるではないか。ずぼらでだらしなくて、でも根は案外生真面目で、自分の気持ちはストレートに言えない拗^す

6) 1980 年代、BBC がテレビでシェイクスピアの全 37 作品を放映した時期に、映画館の大きなスクリーンで見る沙翁劇とテレビの小さな画面で見るそれは、同じか違うかという議論をずいぶんした。しかしその後、一般の映画でさえ、映画館で鑑賞するよりは DVD をレンタルしてきて自宅のテレビやパソコンで見るのが当たり前になり、スクリーンの大小はあまり問われなくなった。だが、NT ライブをきっかけにして、今一度その議論を復活させるべきかと思う。

ね者⁷⁾。それはキニアの役作りよりも、ハイトナーの演出によるのかもしれない。彼の舞台の明解さは、ただ単に設定を現代に移したことから来るのではない。沙翁劇に現代人を闊歩^{かつぽ}させるのが上手なのである。

そしてオセロー。エイドリアン・レスターは軍人としては凜^{りん}として頼りがいがあり、しかしあけっぴろげで軍隊以外の世界をあまり知らない將軍を演じた。腹の底を見せぬイアーゴに存外容易にたぶらかされる。

人間、年をとってくると、わかってしまえば簡単なことがわかってくるものである。公人として偉大な人物が、私的にはいかにふつうで、無邪気で、時には愚かかというのも、そのひとつである。僕も若いころは、仕事ができる人はそれなりに人望があり、徳も高いと素朴に思い込んでいた。けれども能力と地位にはギャップがあり、さらに人間性や私生活となると、それらの間には関連性なんてないんじゃないか。人の上に立つと、嫌でも明るく、前向きに、豪気に見せなければならぬ。だが、それが高じると、いつの間にか世間を知らず、人の心を理解せず、おまけに家庭もボロボロになったりして。外から見える公人の姿とその人物の裏側は、異なっていて当たり前？！

『オセロー』も四大悲劇といい英雄將軍の話というから、つつい壮大な悲劇なり叙事詩なりを想像してしまうのだが、実は小さな家庭悲劇であり、シェイクスピアはそうした前方からは窺い知れない英雄の後ろ姿にこそ人間の本質を見ている。僕も偉い人[・]たちとそれなりに付き合わなきゃならない経験を通して、そんな表に出したくない公人の人間性を意地悪く描いた沙翁劇の面白さがよくわかるようになった。

オセローはひどく愚かな人物ではない。巷^{ちまた}によくいる、ごくふつうの人間なのである。

主人公について、もうひとつ。以前オセローは、白人の名優が黒塗りで演じるのが通例だった。そうになると、肌はアラブ系の褐色にするか、それともアフリカの真っ黒なニグロに扮するかという問題が出てくる。ムーア人とあるから

7) 日本の大学の教員にもこの手の輩はよくいる。インテリの嫉妬は始末に負えない。陰湿。しかも“口先労働者”だから、理詰めでとんでもないことを平気で並べ立てる。

おそらくは褐色のイスラム教徒なのだろうが、ローレンス・オリヴィエは黒光りがするほどの黒人になりきった。イアーゴー役のフランク・フィンレーには抑えた演技をさせ、自分は大きな振りの大歌舞伎を披露した。今見ても惚れ惚れする千両役者の名舞台だが、“ワンマンショー”のきらいがなくもない⁸⁾。

もう1本、僕の好きな『オセロー』は、イアン・マッケランがイアーゴーに扮したRSCの公演(1989年、ジ・アザー・プレイス)である。この時はアメリカの黒人オペラ歌手ウィラード・ホワイトにオセローを演じさせた。太くて低い、うっとりする声、だがマッケランと並ぶと、どうしても演技力に差がついてしまう⁹⁾。

『オセロー』は両雄並び立たずの典型の芝居である。名優が名演技を披露すればするほど相手役者がどう応じるかが難しい。さりとて名優を二人起用すると、収拾がつかなくなる。

また、面白いのは、ひとたびオセローに黒人を配すれば、観客は傭兵隊長がアラブ系かニグロかと詮索しなくなることである。最近はいギリスの演劇界も、多人種・多文化が当たり前になり、白人以外の俳優も沙翁劇にふつうに登場するようになった¹⁰⁾。が、むしろ黒人だったら誰でもオセローを演じられるわけではない。

8) オリヴィエがナショナル・シアターの初代芸術監督をしていた1964年に自ら主演した名舞台(オールド・ヴィク劇場、演出ジョン・デクスター)を、スタジオに同じセットを組み直して撮った映画『オセロー』(1965年、イギリス映画、監督スチュアート・バージ)がある。古臭いと笑うなかれ、こんな演技ができる俳優は、今のイギリスの演劇界に誰もいない。拙著『シェイクスピア・オン・スクリーン』三修社、1996年、第2章第1節「舞台の演技——オリヴィエの『オセロー』」参照。

9) ストラットフォードの小劇場で初演された舞台。テレビ放送された作品が、今でもDVDで楽しめる。お勧め。同書、第2章第4節「本場の舞台——RSCの『オセロー』」をご参照あれ。

10) 昨年[2015年]のストラットフォードで見た『ヴェニスの商人』(RSC、演出ポリ・フィンドレー)では、イスラエルの俳優にシャイロックを演じさせていた。でも、う〜ん、ユダヤ人がシャイロックに扮すれば、それでいいってわけじゃないだろう、という出来だった。また、傭兵隊長だけでなくイアーゴーも黒人にした『オセロー』(RSC、演出イクバル・カーン)も見た。二人とも黒人となれば、戯曲にある人種差別の問題が消え、その分二人を対立させる別の要素が浮き彫りになって、なかなか面白かった。同じ素材でも、いろいろと料理してくれるのだ。

エイドリアン・レスターは黒人というだけでなく、現在のロンドンの舞台で主役を張って誰も文句を言わない役者である。もっとも、レスターとキニア、二人の達者な演技を存分に楽しみながら思ったのは、そびえ立つ名優の時代は終わったな、と。

細工は流々、イアーゴは段取りを済ませると、5幕2場、脇役に転じてオセローにスポットライトを譲る。デズデモーナ（オリヴィア・ヴィナル）を殺し、すぐに愛妻の貞潔だったことを知って嘆くオセロー。レスターがシェイクスピアの詩行を切々と朗じて、賢明ならざる男に観客の共感をグッと引き寄せる。ありのままの私を伝えてくれ、「愚かにではあるが、心底から愛した男¹¹⁾」と。

現代に設定を移し、ふつうの現代人が登場すると、古典劇は大時代がかった本来の魅力と深みを損なうことがしばしばある。しかし、ハイトナーの現代バージョンがそうっていないのは、二人の性格俳優がピタリと息を合わせ、みごとなアンサンブルを築いていることに大きな理由がありそうだ。キニアが英雄を奈落に突き落とす悪行にも心躍ったが、見終わるとレスターの語る沙翁の詩がオセローの愚かさ、いや純粹さを際立たせ、我々の心を浄化してくれる。

なるほど、オセローが高貴^{ノブル}なのは彼が英雄將軍だからではないのである。

（2016年1月 脱稿）

11) “Of one that loved not wisely but too well.” 有名な、そして味わい深い一句。